高校生模擬議会に関する一考察

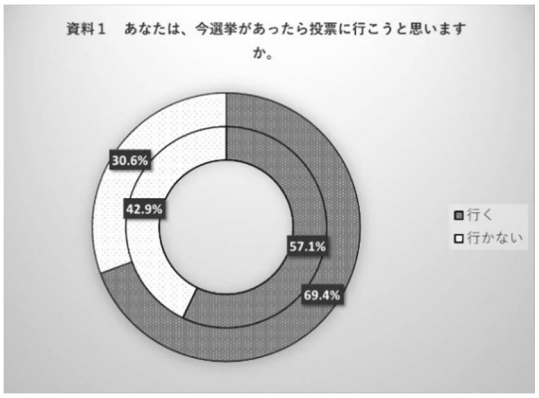
総務省主権者教育アドバイザー
（明治大学文学部特任教授）
藤井　剛

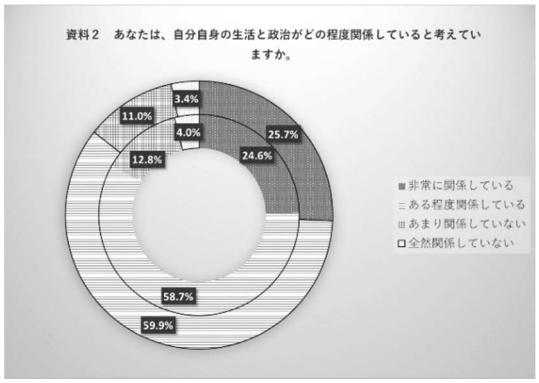
高校生模擬議会に関する一考察

総務省主権者教育アドバイザー　藤井　剛

高校生模擬議会の当初から参加させていただき、今年度は各校で実施したグループワークでコーディネーターをさせていただいた。3年間を振り返りながら、高校生模擬議会の役割を考えてみたい。

高校生模擬議会同様、高校生による「政策提言」を執行部や議員へ行っている県は、青森県以外にも存在している。しかし、青森県の高校生模擬議会の第1の特徴は、各校の代表が選出される際に学校でグループワークを行い、学年などで「青森県の活性化」について議論を行い、ボトムアップした提案を代表が県議会議員に行う点である。第2の特徴は、「青森県の活性化」という地域の課題解決を、「人口」「農業」「観光」などのテーマごとに資料から考えさせ、そのグループでの議論の過程で、地域への関心を向上させるだけでなく、自分の生活と政治との関連性への認識を高めさせている点である。この2つの特徴により、いわゆる「主権者教育（＝投票行動を高めていく教育）」の効果が高まるのではないかと考えている。





右の資料は、千葉県のある高校で、選管が「模擬選挙」を行った前後のアンケートである（内側が実施前、外側が実施後　N＝329）。資料1から、模擬選挙後に「投票行動」は高まるが、資料2から「自分の生活と政治との関連性」の認識がほとんど変化していないことが読み取れる。このことから、模擬選挙により短期的な「投票行動」は高まるが、自分の生活と政治の関連性が実感できないため、その「投票行動」が長続きしないと考えている。実際、2016年参院選での18歳投票率は51.28%だったが、その若者が1歳年をとっただけのはずの、2017年衆院選での19歳投票率は33.25%であった。つまり18歳で受けた主権者教育の効果は長続きしなかったのである。その長続きしない要因が「自分自身の生活と政治との関連性」が実感できないことだと考えている。

ここでは、高校生模擬議会の目的が「地域の課題を考えるグループワークや模擬議会を体験することにより、政治や選挙に対する関心を高める」ことであることを確認し、高校生模擬議会当日と各校で実施したグループワークに分けて、高校生は「自分の生活と政治との関連性が実感されていたか」を検証したい。

１．高校生模擬議会[1)]

平成30年度高校生模擬議会での各校の発表は、プレゼンテーション能力が高まり、発表趣旨が明確な内容であった。また各校の発表は、「自分たちに出来ること」という視点が盛り込まれており、当事者意識をもったプレゼンテーション内容であったとまとめることができよう。

筆者は模擬議会開催初年度から、模擬議会終了後の「振り返り」を担当しており、3年間の「振り返り」で行ったアンケート（n＝93）を中心に「当事者意識」＝「自分の生活と政治との関連性が実感されていたか」を確認したい。質問項目と3年間累計の割合を下に示す。

質問1「これまで青森県のこと（例えば、青森県の現状、青森県の未来など）を考えたことがありましたか？」　→ 22.6%

質問2「今回のプレゼンや学校でのグループワークを通して、あなたにとって『青森県の活性化』は身近な問題になりましたか？」　→ 89.2%

質問3「今回のプレゼンなどを経験して、青森県や地域の活性化のためにこれから何か活動したいという気持ちになりましたか？」　→ 92.5%

質問４「18 歳になったら選挙に行く気持ちになりましたか？」→ 89.2%
質問５「この高校生議会を経験して、選挙に行く気持ちや政治に対する関心は上昇しましたか？」
→ 89.2%

という結果だった。これまで青森県の現状などを考えたことがほとんどなかった高校生が、「青森県の活性化」を身近な問題と捉えられるようになったり、何か活動をしたくなったりしたことが読み取れる。特に、質問後の意見交換では、青森県の活性化のために「ボランティアをしたい」という意見の他に、「県や行政と連携したい」や「投票の際の基準にしたい」などの意見があり[2)]、質問２の「青森県の活性化」を身近な問題と捉えることと質問５の「選挙や政治への関心」が上昇したことの関連性が導き出されていた。その結果が、質問４の「投票行動」を高める結果となっていると考えている。

以上の振り返りから、模擬議会を経験することにより「自分の生活と政治との関連性が実感され」て「投票行動」が高まっていったことが分かる。

２．グループワーク[3)]

参加３校全てのグループワーク実施前後にアンケートをとり、生徒の変化を検証したのが 37 ページ以降のアンケート結果である。アンケート結果から、グループワークを通して、青森県の活性化は身近な問題となり、自分の生活と政治が関係していることが実感され、そのことが政治や選挙への関心を高めたと分析することが出来る。

問題はなぜそのような変化が起きるかである。ここでは、「観光」をテーマにしたあるグループの活動を見てみたい。このグループでは、ブレインストーミングの中で、「青森県は観光名所がたくさんあるのに、なぜ観光客が増えないのか」という認識のもと、「冬は雪のため観光客が訪れにくくなる」「新幹線の本数が少ない」「観光地の宿泊地が近くにない」「宣伝不足」「観光地の開発が進んでいない」「若者向けの観光地が少ない」などの「課題や現状」が出された。その後の「解決策」の討論では、それらの課題に対応して、「逆に『雪』を観光資源にする」「青森の文化を感じてもらう『民泊』を始める」「宣伝を行政や観光組合だけが行っているのが間違いで、若者の横の繋がりやＳＮＳなどの活用を始める」などの「解決策」が考え出された。最終的には「宣伝不足」が最大の課題で、「青森県には良いところがたくさんあるので、若者がＳＮＳを使って『インスタ映え』する写真などで積極的に青森県の良さを発信する」ことを提案した。注目すべき点は、その話し合いの過程で、「行政などに任せてばかりではいけない」「県全体で取り組むためには、政治も動かさなくてはならない」など、当事者意識が喚起されたり、行政や政治などと連携したり動かしていく必要があることが議論されたことである。

以上のような、グループでの話し合い過程の中で、自分たちの生活や青森県の課題解決と政治や行政との関連性が認識され、生徒の変化が見られるようになったと分析することが出来よう。

３．まとめ

３年間、高校生模擬議会に関係させていただき、「地域の課題解決から考える主権者教育」こそが、投票行動を長続きさせる可能性があると考えるようになった。今年は「選挙イヤー」である。高校生模擬議会を経験した高校生がどのような投票行動をとるか楽しみである。

注１）高校生模擬議会の当日の時程などの概要（1 頁）や当日の発表内容（５～３２頁）などは、本記録集の当該ページを参照していただきたい。

注２）これまでの模擬議会終了後の参加者へのアンケートでは、「八戸の郷土料理であるせんべい汁を使って八戸をＰＲする『せんべい汁研究所』に参加して、Ｂ－１グランプリにボランティアで参加してきました」「県議会や町の議会の広報を見るようになりました」「地元の新聞を読むようになりました」「高校卒業後、青森から離れようと思っていたが、残ろうと考えるようになりました」「今年の夏休みに観光ボランティアをすることにしました」などの回答があった。

注３）グループワークの概要やアンケート結果は本記録集の３３～３８ページ、実施手順については、次ページ以降を参照していただきたい。

（参考）

「グループワーク」の実施手順

参加校で実施した「グループワーク」の実施手順を示す。ここで手順を丁寧に示す理由は次の３点である。第一に、青森県の高校生模擬議会の特徴の一つはこのグループワークであり、高校生模擬議会当日のプレゼンテーションも重要だが、そのプレゼンをボトムアップする意味で、各校で行うグループワークの質が課題となるからである。第二に、３７～３８ページのアンケート結果から、このグループワークで高校生の「投票行動」などが大きく変化することが読み取れ、いわゆる「主権者教育」の重要なカギを握っているからである。第三に、2018 年 3 月に告示された高等学校新学習指導要領で取り上げられた「主体的・対話的で深い学び（＝アクティブ・．ラーニング）」の実践例として参考にしていただきたいことである。

なお、このグループワーク実施前に、選挙管理委員会が準備した「打合せメモ」をもとに、実施校との間にかなり綿密な打合せがあったことを指摘しておきたい。

１　開始前の準備[1)]

（１）生徒は事前に配布されている資料を持って、テーマやグループごとに会場に集合する[2)]。

（２）本日のグループワークは、各グループに与えられたテーマに沿って「青森県の活性化」の提案をプレゼンテーションすることであることをコーディネーターが確認する。

２　グループワークの時間の目安（100 分の場合）

（１）青森県の現状の中で「最大の課題」を考える（合計 25 分）[3)]。

①各グループに与えられたテーマに関して、「青森県の現状」についてブレインストーミング（以下、「ＢＳ」）を行う（5 分）。

②ＫＪ法で整理を行う（10 分）。

③グループで話し合いを行う（10 分）。

（２）課題の解決方法を考える（合計 30 分）。

①各グループで考えた「青森県最大の課題」の解決策を考える準備を各自行う（5 分）。

②「課題解決策」についてＢＳを行う（5 分）。

③ＫＪ法で整理する（10 分）。

④グループで課題の解決方法を考える話し合いを行う（10 分）。

（３）プレゼンテーションの準備を行う（20 分）。

（４）プレゼンテーションを行う（20 分）。

（５）振り返り（5 分）。

３　具体的なグループワークの手順

（１）課題を考えよう。

①自分たちのグループの「テーマ」を確認し、事前に調べてきた「資料」を準備する。

②事前に準備してきた「青森県の現状」＝「どのような問題があるのか」「なぜそれが問題なのか」を、ＢＳで出来るだけ多く挙げる。

＜ＢＳの手順＞

Ａ．グループのメンバーが丸くなって座り、真ん中に模造紙をおく。

Ｂ．時計回りに一人ずつ、「青森県の現状」＝「どのような問題があるのか」「なぜそれが問題なのか」を一つあげ、それをフセンに 1～2 行程度で書き模造紙に貼る。

Ｃ．それを 5 周以上行うよう努力する。

Ｄ．ブレインストーミングの注意事項

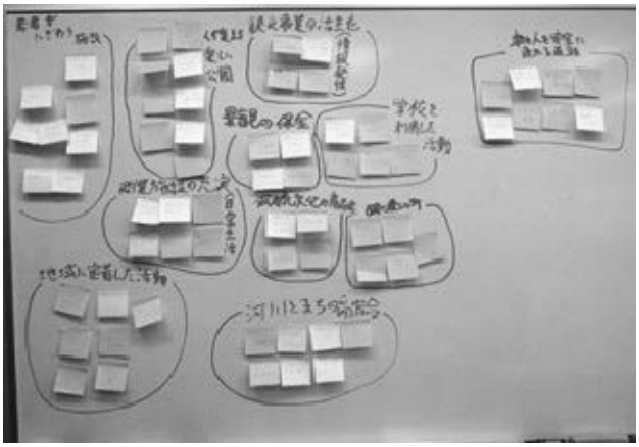
ａ．他人の意見を批判してはいけない。

b．「こんなことを言ったら笑われはしないか」などと考えず、思いついた考えをどんどん言う。
c．「質より量」なので、できるだけ多くのアイディアを出す。
d．発言の順番がまわってきたら必ず何か言わなければならない。「特にありません」「前の人が言ったのと同じなのでありません」は不可です。
e．用意してきた「問題」など以外にも、他人の意見を聞いて連想を働かせたり、他人の意見に自分のアイディアを加えて新しい意見として述べてもよい。
f．メモ用紙を置き、他の人の発言を聞きながら思いついたことをメモしておくとよい。

③「青森県の現状」のフセンを「ＫＪ法」で整理する。

＜ＫＪ法の手順＞
A．全てのフセンを読めるように広げなおし、全体に目を通す。
B．「現状」「問題」「課題」など、内容や意味などが近いものを近くに集める。
C．近くに集め終わったら、そのフセンのまとまりをマジックで丸く囲み、グループに簡単な「題名」をつける。
D．「題名」やフセンの内容を確認しながら、どのグループが、青森県にとって「一番解決すべき問題・課題」なのか、資料による根拠をはっきりさせながら話し合いで決める。

※完成例



（２）解決方法を考えよう。

①青森県の「一番解決すべき問題・課題」が決まったら、その問題や課題を「どのように解決するか」を各自考えてフセンに書き、具体的な解決策を話し合うための準備を行う。

＜解決策を考える際の注意事項＞
A．具体的な解決策を考えること。例えば、「どのくらいお金がかかるか」「そのお金はどこから出すか」「誰が解決（実行）するのか」「解決方法は現実的で具体的か」などを考慮すること。
B．実現可能性も考えること。例えば、「だいたい 100 億円くらいかかりそうだが、県の公務員の給料を 1 割カットしてそれに充てよう」とか、「かなりの人手が必要だが、県内の高校生全員でボランティアしよう」は難しい。
C．解決策の実行で、他の課題が出ないか考えること。例えば、「住民の生活の利便性を考えて『コンパクトシティ』化を進めるので、街から遠くに住んでいるお年寄りたちも、駅の近くの集合住宅に必ず住んでもらう」という案は、お年寄りたちの「不便でも、現在のところに住み続けたい」という要望を無視する可能性が高い。

②各自考えた「青森県の課題解決方法」を、ＢＳで出来るだけ多く挙げる。

☆ＢＳの手順や注意事項は（２）①参照

③「青森県の課題解決方法」のフセンを「ＫＪ法」で整理する。その後、「題名」やフセンの内容を確認しながら、どのグループが、「青森県の課題解決方法」として一番なのか、資料による根拠をはっきりさせながら話し合いで決める。

☆ＫＪ法の手順は（２）②参照

（３）プレゼンテーションの準備をしよう。

①使用するのは模造紙１枚である。準備時間が少ないので、「解決すべき問題・課題」「一番解決すべき問題・課題」「具体的な解決方法」を中心に、図式化などを行いながら資料化する。

②グループ内で手分けして準備するとよい。例えば５人のグループならば、模造紙の準備をする生徒が３人、プレゼンテーション原稿を作る生徒が２人などにする。

③時間が余ったら、プレゼンの予行を行う。

（４）プレゼンテーションを行おう。

①テーマごとに集まり、各グループがプレゼンテーションを行う。

②プレゼンテーションの時間は、「入れ替わり」「模造紙の準備」などを入れて、各グループ４～５分である（グループワークの途中で指示する）。

（５）振り返りを行おう[4)]。

①グループワークの活動を振り返りながら、事後アンケートに記入する。

注１）事前の「打ち合わせ」で、事前指導として

①生徒のグループ分けと会場でグループの集まる場所の指定や、このグループワークをなぜ行うのか説明

②資料「統計データから見る青森県の姿」の配付と読み込み、各自で資料をさらに探しておく指示、また資料から青森県には「どのような問題があるのか」「なぜそれが問題なのか」などを出来るだけたくさん挙げ、メモして臨むよう指示

③時間があれば、「ブレインストーミング」「ＫＪ法」の説明や方法のレクチャー

④事前アンケートの実施（事前アンケートはグループワーク当日に回収）

などをお願いしてあった。

注２）会場は、大会議室など机があると作業が行いやすいが、小体育館などでも実施可能である。また、各グループのプレゼンテーションで模造紙を貼る「会場の壁」「移動式黒板」などの用意をお願いしていた。

注３）会場校の先生方にも、グループワークのお手伝いをお願いした。具体的には

①グループワークに入り、各グループに２回程度アドバイスをする。特に、資料を根拠に考えさせたり、実現可能性（予算、マンパワー、解決方法など）のチェック

②各グループの作業状況をチェックし、遅れているグループの指導

③テーマごとの発表の司会進行や時間の管理

などである。なお、グループワークのテーマは、「人口」「製造業」「農林水産業」「輸出入」「観光」の５つから学校の実情等を考えて選択してもらい、事前にクラスやグループに割り当ててもらっていた。

注４）事前の「打合せ」で、事後指導のお願いも行った。具体的には、

①振り返りで時間がなかった場合は、事後アンケートの実施

②出来れば、学校独自の「事後指導」のお願い。例えば、

Ａ．与えられたテーマについての新聞スクラップ活動や「いっしょに読もう！新聞　コンクール」への参加

（参考）「いっしょに読もう！新聞コンクール」（http://nie.jp/month/）

Ｂ．文化祭で「各テーマ１位」が「合同発表会」を開催し、地域への発表

Ｃ．与えられたテーマについてのレポート作成

Ｄ．地域活性化のＮＰＯやボランティア団体の紹介や参加を促す

などである。